

パネルディスカッション6：在宅医療：女性医師の親和性を臨床に活かす ～「家族ケア」のノウハウに迫る～

演題名	生活を支える視点を大事にした医療や看護や介護を通して家族ケアを考える
------------	------------------------------------

概要

共依存のような関係性をもつ家族間での介護に、私たちはできるだけ寄り添うしかないこともある。あるいは、できるだけ関わりを避けようとする家族の存在を気にしながら、患者さんの思いに寄り添うしかないこともある。ただ、寄り添うことでよしとするだけでなく、私たち縁あって関わるものとして、患者さんとその家族の関わりのあるように意識的な投げかけをすることも、あっていい。その投げかけの方向性や深さは、患者さんの生活を支える視点を大事にして計られるべき。

当院の病棟や在宅で亡くなられた患者さんのご家族に、49日を過ぎた頃、担当看護師が、ご家族にカードの形の手紙を出している。ご家族からこもごもの思いが綴られたお返事をいただくことがあり、あらためて、私たちのケアを振り返ることになる。毎年定例行事で行っている、餅つきや、お花見や、コンサートに、亡くなられた患者さんのご家族がきてくれて、とてもうれしい時間となることがある。

一方、患者さんが亡くなられ、残されたご家族は一人になってどうしているかと、スタッフの皆が気になることがある。手紙に返事をくださったり、何かの折に顔をみせてくださったのなら、私たちはちょっと安心したりするのだけれど、そうでない場合、状況を知る機会はなかなかない。患者さんの生活を支える視点でまずまずのケアができていると、ご家族のその後を知る機会につながることもある。

こうしたことのいくつかの事例をお話しできればと思う。制度に位置づけられない家族ケアについて考え、一步を踏み出すことで、私たちのケアは豊かになる。そのためには、生活支援の視点で、必要とされていることに臨機応変に柔軟に取り組めるよう、従来の医療の枠組みにとられない仕組みづくりが必要であることも指摘したい。